

## 研究発表

## 「神の知恵」はロゴスか聖霊か

## —エイレナイオスとテオフィロスによる「神の知恵」解釈—

関西聖書神学校 金井由嗣

## 1. 研究の主題と範囲、研究史

古代教会におけるキリスト論・三位一体論の形成過程において、箴言3章及び8章における「知恵の呼びかけ」の解釈はきわめて重要な位置を占めている。すべての被造物に先立って存在し、神の創造のわざを「かたわらで」眺めていた知恵が一種の人格的主体として人間に呼びかけるこれらの章句は、「神のロゴス」であるキリストの先在についての証言として、多くの教父により引用され、ロゴス・キリスト論の典拠とされているのである<sup>1</sup>。ユダヤ教及び初期キリスト教におけるこれらの章句の解釈は従来「知恵の人格化」(the personification of wisdom)として研究されてきた。

発表者は以前に、「知恵の人格化」は「人格」(ペルソナ)の定義から言って、もっぱら古代キリスト教思想史における旧約知恵テキストの解釈史として取り扱われるべき問題であることを提言した(資料②)。この解釈史を追求する中で、箴言の「神の知恵」がロゴスではなく聖霊を指すものと解釈している事例があることに気付き、その由来とキリスト教思想史における意義について考察する必要があるため、ここに概略を発表する。まだ研究を始める前の予備作業の段階であり、研究発表の名に値しない序論的な発表であるが、キリスト教思想の基本にかかわる重要な問題であり、かつ従来このような角度からの検討が十分なされていなかった主題でもあるため、問題の所在を知っていただくこと自体に価値があると考えられる。

なお手に入った範囲の参考文献を表に挙げてあるが、網羅的・包括的なものではない。その中では Jaques Fantino が一項目をあててこの問題を論じているが、グノーシス主義やユダヤ=キリスト教の伝統に見られる「女性としての知恵」モチーフとの関係を指摘するにとどまっている<sup>2</sup>。Bernard Sesboué は「神の両手」に1章を当てて詳細に論じており<sup>3</sup>、グノーシス主義との関連と共に、この表現が創造論の文脈に限定して使用されていることを的確に指摘している。本研究においても、そこから教えられた点は少なくないが、より広い思想史的な文脈までは議論が及んでいない。

<sup>1</sup> 4世紀のエウセビオス『教会史』において、すでにこの解釈は議論の余地のないものとして扱われているように見える(資料①)。

<sup>2</sup> Fantino, pp.287-291.

<sup>3</sup> Sesboué, pp.183-199.

## 2. テキスト分析

### (1) エイレナイオス「神の両手」の思想 [『異端反駁』第4巻20章]

現在われわれが著作を手にするのできる初期キリスト教思想家の中で、明確に箴言の「神の知恵」を聖霊と解していることが判明するのは、リヨンのエイレナイオスとアンテオケのテオフィロスの二人だけである。そのうち、エイレナイオスが『異端反駁』で展開している主張は、用語の一貫性と論理性においてより優れているため、まずこれを検討することにしたい(資料③)。

#### 「言(ロゴス)」=御子、「知恵(ソフィア)」=聖霊

エイレナイオスは、箴言8章の「知恵」を聖霊と解釈する(資料③)。先に述べたようにこの解釈は彼に先行するキリスト教思想において類例がないものであるが、いまだロゴス・キリスト論も三位一体論も(少なくとも用語としては)確立していない時期に生きていた彼にとって、これは必ずしも突飛な考えではない。知恵を霊と呼ぶことは、さらには神の霊とみなすことさえも、「ソロモンの知恵」に既に見られる思想であり(資料④)、キリスト論成立過程における同書の影響の大きさを考えれば、この考えを良く似た性格の(しかも同じ著者によると考えられていた)箴言の解釈に適用することはごく自然だからである。ここでのエイレナイオスの独自性は、「言葉」と「知恵」とを別個の存在と考え、それぞれ「御子」と「聖霊」に当てはめた点にある(「ソロモンの知恵」では「言葉による創造」と「知恵による創造」とは同じ事象の言い換えであるが、エイレナイオスは平行的に理解しているようである)。

#### 創造における「神の両手」

エイレナイオスの「神の知恵」解釈において際立って特徴的な表現が、「神の両手」である。もちろんこれは神の物質的な身体について述べたものではなく、創造における神の経綸(オイコノミア)において言<sup>ロゴス</sup>と知恵<sup>ソフィア</sup>が中心的な役割を担ったことを言い表したものである。ここでは創造が天使たちの協力を必要としない神自身の業であること(従って言と知恵とは神自身から区別される別の存在ではない)、しかも御父自身が無媒介に創造したのではなく言と知恵を用いて創造された(従って言葉と知恵とは働きにおいて御父と、またお互いに区別される)ことが強調されている。彼の議論は終始一貫して創造における神の経綸を問題としており、神存在の神秘について語っているのではないことを理解しておく必要がある。

### (2) テオフィロス、言と知恵との関係についてのゆらぎ

テオフィロスにおいては、エイレナイオスと同様に神の言<sup>ロゴス</sup>と知恵<sup>ソフィア</sup>とを区別する表現(資料⑤)と、言と知恵とを同じものの言いかえとみなす表現(資料⑥)とが混在している。それも同じ著作中のごく近い箇所にならび同居しており、見るからに不統一な印象を受ける。エイレナイオスとの先後・影響関係も慎重に考慮する必要があるが、なおテオフィロス自身の著作意図と文脈に即した考察が必要である。なおキリスト論・三一論との関係で言えば、彼が独自に使用した「トリアス」の用語と、おそらくこの脈絡の中で初めて使用された“πρόσωπον”(顔、ラテン語の *persona* に対応)の出現とが注目に値する。ユスティノスからエイレナイオスを経てテルトゥリアヌスによって一応の確立を見るロゴス・キリスト論と三位一体論との、まさに成立前夜の思想状況を現しているものと見なして良いであろう。

### 3. 問題の所在

#### (1) 思想史的脈絡

- ① ロゴス・キリスト論との関係
- ② 三一論との関係
- ③ グノーシス主義（ヴァレンティノス派）との関係

#### (2) 思想的意義

- ① キリストと聖霊との論理的優先関係
- ② 創造論におけるロゴス、知恵、霊の位置づけ
- ③ 三位一体論の存在論的性格と経綸論的性格
- ④ 女性原理？

### 4. 今後の研究の方向

#### (1) 問題となるテキストの文脈と位置づけ

#### (2) エイレナイオスとテオフィロスの前後関係及び影響関係

#### (3) 先行する思想家との関係（特にユスティノスとタティアノス）

#### (4) 後続する思想家との関係（特にテルトゥリアヌスとオリゲネス）